



がしました。

◇ ◇ ◇

さて、東西ドイツ統一の数日前に、統一記念のベルリンマラソンがありました。二万五千人におよぶ世界のランナーや市民が参加して、ブランデンブルク門を続々と走り抜けて行く光景は、本当に感動的でした。思わず、パッハのブランデンブルク協奏曲を目のあたりに見ているかのような壮大で厳肅な気分浸ってしまいました。

二万五千人の人々の流れる光景・・・生きて輝いている人々の希望の顔・・・。

東西ベルリンを貫いて、広い道路と緑濃い街路樹。均整のとれた美しい街並み、景観に魅了されたのです。

テレビ中継に釘付けになりましたが、いろいろと考えさせられました。

東西のイデオロギーや政治経済体制の違いにかかわらず、「都市づくりの基調は同じだったのではないか」とか、都市づくりに表されている歴史的な生活感覚の熟成度の高さを思わずにはいられません。ブランデンブ

ルク門を閉ざした数十年間が、あつという間に克服され一つのドイツになれるということとは、同じような楽器の共鳴現象のようなものだったのではないかと思います。

幸いにも、東西両ドイツ国民は、冷戦構造下で戦火を交えることはありませんでした。同じ民族とはいえ、朝鮮半島では戦争の惨禍を経験しています。この戦争の傷痕を癒していく朝鮮民族の民主的自主統一への道のりは、険しいものと考えられますが、今世紀中には実現できるよう願わずにはいられません。そのために「日本がすべきことは何か、できることは何か」を政治家として追求していかなければならないと思います。

◇ ◇ ◇

一九九〇年二月一八日。第三十九回総選挙。栃木一区で、十三万十八票のトップ当選を果たすことができてから、早一年にならんとしています。

二月二十七日の初登壇。特別国会における衆議院本会議において、地方行政委員会における質問など通算五時間

におよぶ代表質問（平成二年四月十九日）は、新人議員として貴重な経験になりました。また中東国会では、院内外において廃案を目指して力いっぱい頑張りました。消費税国会から中東国会、そして十二月十日から通常国会が始まりました。

世界の政治が激変し、それに対応して日本の政治も、もみくしゃになっていきます。しかし、平和と人類、環境と福祉の問題に日本の政治路線をしっかりと選択しなければならぬこの時代に、国政に携わる者として大きな責任を自覚せずにはおられません。

静かに振り返ってみれば、本当に歴史的な「変革の時代」に政治家になったものだという実感がいたします。こういう時代にさしかかったからこそ、私のような者が国政の場に送り出されているのだとも考えさせられます。

軍縮平和の流れや地球環境問題の日常化、高齢化社会の急速な到来、貿易摩擦とコメ市場開放阻止の課題等々・・・。どれ一つとっても、政権の一つや二つが吹っ飛んでしまいうような大きな問題を抱えています。

市場経済原理を基礎としながら、社会的矛盾の解決のための社会化計画を進めていく過程としての社会民主主義を一言で表した「可能な限りの競争を、必要な限りの計画」を政策の基軸にして、より人間的な社会を目指していきたいと思ひます。

私が二十九歳のときに書いた詩を一つ紹介します。

汗と埃でさらついた夕日をあび
書写真を握った
政治家の銅像が建っている
死後まで裁かれる人のように
頭髪から額まで

青ざめて光っている
政治や政治家に対して、基本的に敵意を抱いていた時代の私の詩です。

栃木県内にも著名な政治家の銅像が建っていますが、利益誘導型や開発主導型の政治や政治家の時代はもうすぐ終わりになるのではないかと思います。歴史によって私たちは裁かれるのです。良かれ悪しかれ、自分の銅像はまっぴらです。

最後に、私の好きな詩人の詩を紹介いたします。石原吉郎というシベリア強制収容所帰りの詩人です。昭和五十二年十一月十四日、自死しました。

一滴の静寂を海洋の広さから
すくいぬために
どれだけの嵐が
かさなりうねり去っただろう
だが嵐の長さ

静寂が寸刻にすぎぬことが
私には重大なのではない
私に重大なのは
広大な海洋に一滴の
平和なかなしみが
均衡することだ